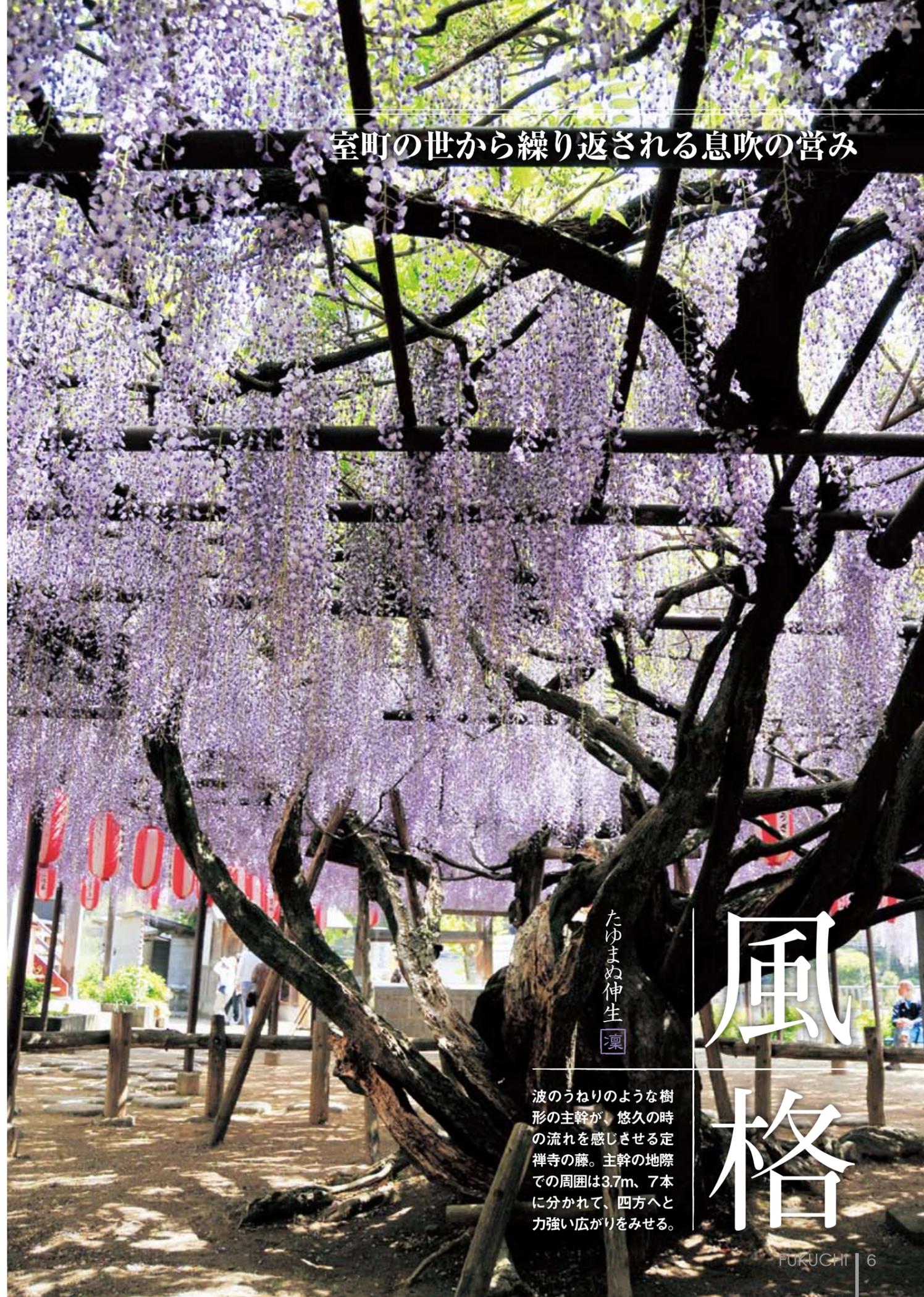


## 室町の世から繰り返される息吹の営み



# 風格

たゆまぬ伸生 凜

波のうねりのような樹形の主幹が、悠久の時の流れを感じさせる定禅寺の藤。主幹の地際での周囲は3.7m、7本に分かれて、四方へと力強い広がりをみせる。

### 県指定の天然記念物に

約800㎡の藤棚にゆれる花房の数は約10万本。人の髪の毛の数にも匹敵します。近隣に名を馳せた定禅寺の藤は、昭和37年7月、福岡県の天然記念物に指定されました。その際、大庭達城前任職は「誰にも接し、愛でてほしい」との意を込め「迎接の藤」と命名。「白雲山 迎接院 定禅寺」の院名にもちなんだ「ツタリ」の名でした。「例年4月29日に行う『藤祭り』は、炭鉱閉山の翌年から始めました。地元を少しでも勇気づけたいという父のはからいで」と、その志を受け継ぐ大庭成美住職



躍動的な幹から高さ2.2mの棚へと樹が伸び、花房は1mを優に越える。花房の数が少ない年は長く、多い年は短い。



大庭 成美氏  
幼少から藤と歩んできた定禅寺住職

は、常に藤の手入れにも余念がありません。5百年を越す老樹の手入れは相当なものの。1月に剪定、開花後に気の遠くなるほどの花房を摘む「摘花」、そして5月下旬には敷地内70か所に肥料を入れます。特に実らないようにするための「摘花」は、樹の衰弱を防ぐ大切な根気のある作業。肥料は「なるべく自然のまま」という住職の意向で、化学肥料は使いません。「藤を見に訪れた方々も、ここで自然に手を合わせる心を意識されると思います。」

これからも開かれた寺として在り続けた」と大庭成美住職は目を細めました。多い日には延べ千人近くの花見客が訪れたという定禅寺。しかしその分、地面は踏み固められました。弱った藤を励ますように「藤を守る会」(稲富明会長)が発足し、平成6年には樹木医の診断を仰ぎます。結果は「放置すれば数年で半分が枯死する可能性が高い」という深刻な状況でした。根部の通気を好む藤の土壌は、硬度15以下が最適とされていますが、迎接の藤の土壌は硬度26。高台のため根を伸ばす範囲も限界に達し、酸欠状態に加え、幹の腐食も進行していました。これを受け、関係者は大規模な土壌改良や治療を施し、やがて藤も樹勢を取り戻していききました。



財津 政義氏(伊方)  
動植物に詳しい福智町文化財専門委員

前任職と親交が深かった文化財専門委員の財津政義さんは「藤の名所は県内に多いですが、天然記念物は国指定1、県指定3とわずかです。一番最初に県指定を受け、昭和初期の姿と見違えるほど伸生したこの藤は、町民の誇りであり、県民の財産だと言えます」と藤守の功績をたたえました。

## 古藤が秘める美と生命力に息をのんだ



↑方城炭鉱閉山(昭和44年)の翌年から毎年4月29日に行われている藤供養の「藤祭り」。

←境内の楠と榎を宿り木にした懸り藤。新緑に紫が映える。



↑藤棚の手前に咲く珍しい八重藤も花見客の人気を集める。